



舞台裏のコース管理に迫る



“ZOZOチャンピオンシップ”のコースセッティング

PGAツアーの「ZOZOチャンピオンシップ」は、10月21〜24日の4日間、アコーディア・ゴルフ習志野カントリークラブ（36H、千葉県）で開催された。

松山英樹が通算15アンダーとし、2位に5打差をつけて米ツアー7勝目を飾った。日本で開催された2度目のPGAツアーで、初めて日本人の優勝者が誕生し、話題を呼んだのは記憶に新しい。松山にとっては今年4月の『マスターズ』以来の優勝となったことでも注目を集めた。

そんな白熱した大会を舞台裏で支えていたのは、他でもない会場となったアコーディア・ゴルフ習志野CCのコース管理スタッフを



ZOZOチャンピオンシップが2年ぶりにアコーディア・ゴルフ習志野CCで開催された

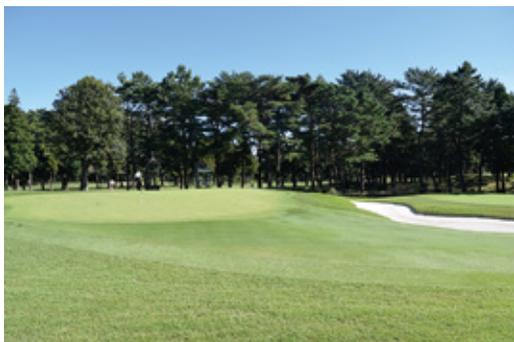


株式会社アコーディア・ゴルフ 習志野カントリークラブ コース管理本部 関東第2エリア第4グループ エリアコースマネージャーの瀧口悟氏

中心としたアコーディアグループのコース管理スタッフ達である。今回、大会前日の10月20日に、コース管理本部関東第2エリア第4グループエリアコースマネージャーの瀧口悟氏に、主催者のPGAツアーからの要求やセッティング、苦労話等を聞くことができたので紹介したい。

主管のPGAツアーからの要求やセッティングに関して

「今回もPGAツアーのコース担当者はデニス・イングラム氏です。彼からは言われていることでやはり一番は、選手の技術を発揮できるようにフェアなセッティングを“です。その他ですと習志野CCのコースの特徴を、もしくは日



大会前日のグリーン

本のベーシックなコースの特徴を活かしたセッティングを求められています。

まず、グリーンの速さについてですが、12フィートを用途に管理しており、刈高は3・2mmです。大会期間中のグリーン刈りはすべて手刈りです。大会の2日前は乾くと13フィートが出たりしました。パッティングも含めてすべてのグ

リーンは同じスピードです。習志野CCのグリーンは結構アンジュレーションがあったり、傾斜もきついので、12フィートを超えてしまうと、ホールのカップを切る位置も限られてきてしまいます。そうなることやりはプレーの幅がワンパターンになり、狭くなってしまいます。主催のPGAツアー側もしつかり4日間、色々な場所に切りたいということで、12フィートは超えないで下さい”という要求がありました。

また、グリーンの草種についてはホールによるのですが、ペンクロスに962とL-93、もしくはT-1をインターシードしています。割合は半々ぐらいです。今回元々のサブグリーンを使用するホールがありますが、ホールによってはT-1が強かったり、962が強かったりと分かれます。PGAツアーからの「フェアな設定」という要求がありますので、硬さとスピードを揃えるのがかなり大変でした。

次にFWについてですが、刈高は10mmと比較的短めのセッティングです。クロスカットではなく、ワンウェイで一定方向に刈ってい

ます。初日はティからグリーンに向かって刈っていき、次の日はグリーンからティに向かって刈っていくなど、日々方向を変えて、芝目を付けないような刈り方をを行います。

前回もすぐく苦労したのはFWの位置です。日本のコースは池があつてFWがあつて、間にラフがあつたりしますが、PGAツアーの考え方は池とFWの間にラフはあり得ないのです。池かFWか、リスクを背負って池を越えた選手はFWからショットを打てなければならぬのに、そこにラフがあるのはおかしい、というものです。白か黒か、のような感じなので、FWのラインを池側にもっていきま

ました。また最近、日本のトーナメントでも行っていますが、アプローチエリアやファーストカットのライン、ラフのラインが段々狭くなつていくことを目にしますが、PGAツアーは白か黒かなので、段々狭くなつていくのを嫌います。なので、ラインをスパッと切つて下さい、右か左かで分けて下さい”と言われる。当然機械で刈れないところも出てきますので、その



FWやラフ

ような場所はバリカンで手で刈つたりしています。

そしてラフについてですが、刈高は80mmです。ギャラリーの方々はパッと見て「大会の割にはそこまで長くないのでは？」と思うかもしれませんが、しかし80mmあれば、ボールもしっかり沈みます。沈み



10番Hのティーイングエリア

方によって、明らかにレイアウトだけではなく、グリーンを狙えそうだったり、ピン位置によってはピンを狙わないで花道を狙うべきか——といった選手にとつてすぐ考えさせられる長さ、ワンパターンにならないようなセッティングだと思っています」

なお、前回（2019年）と比べ、PGAツアーからのセッティングに関しての要求は基本的には同じだという。その背景には前回が大きな問題もなく、無事に開催できたからで、もう一つは新型コロナウイルスの影響で、主催のPGAツアーが観に来られないことが挙げられるという。

「大きく変えている点は、今回は4番のミドルホールで右グリーンと左グリーンを使用しましたが、今回は5番のショートホールで右

グリーン（187ヤード）と左グリーン（191ヤード）を使いませす。前回もそうでしたが、同じホールのグリーンを2つ使用するのには日本のトーナメントでは絶対ない発想だと思えます。PGAツアーとしては、2グリーンが日本の文化で少し、2つあるのだから両方使用しようよ、という、柔軟な発想です」

バンカーの仕上げに苦勞

今回は特にバンカーの仕上げ方に苦勞したと瀧口氏は話す。バンカー整備が一番時間が掛かっていたという話も。これは日本とアメリカ（海外）とのバンカーに関する考え方、捉え方が違うことが背



バンカーはプレートで法面を転圧し、水締めを行っていた

景にありそうだ。今回、バンカーの法面はプレートで転圧をかけて水締めを行うなど、ボールが平面に転げ落ちるほどの硬さだったという。

「主管のPGAツアーから細かく言われるのはバンカーです。すべ



深さにバラつきがあり、仕上げるのに苦勞したバンカー

てのバンカーを同じ硬さにして、同じ砂の量にするように要求がありました。工事で使用するようなローラーでバンカーを固めたり、水を撒いてコントロールしたりと……本当に大変でした。すべての溝の深さを全部同じにするように言われました。深さにバラつきがあると、やはりフェアではなくなります。柔らかい箇所や、深さにバラつきがあるところは何度もやり直しの指示がPGAツアーからありましたね。最後の細かい調整に手間がかかりますので、人員も必要になります」

ここで少し話は反れるが、日本のトーナメントと細かい点で違うのは、日本だと主催のゴルフ関連



バリカンでカットする瀧口氏。その場での教育が効果的

散水に関して多少し話を開けたので触れておきたい。グループコースの強みを活かした人員確保で、どのホールもすべて手散水で行っていたという。

「散水に関しては基本的にはすべて手で撒いています。機械でも悪くはないのですが、最新のイリゲ

散水はすべて手散水で実施

団体のディレクターが計測をする
が、PGAツアーの考え方だとグリーンスピードは開催コースのスタップが計測するということだ。カッターからカッターの色塗りまですべて開催コースの仕事で、そしてコースメンテナンス以外のスタップを絶対にグリーンに上げてはいけない、ということだ。この辺りは日本と違って、PGAツアーでは徹底されているという。



1番Hのグリーン周り

PGAツアーからの細かい指示にもすぐに対応できるのは、瀧口氏のマネジメント能力と、なんといってもグループコースの強みを活かした人員の確保が挙げられるだろう。

**アコーディアグループを活かし
連日120名の体制で作業**

「練習ラウンドは休みも入れていたりしますが、大会開催期間中の4日間は毎日120名体制で作業します。北海道から沖縄までと、全国のアコーディアグループのコース管理スタップが参加しており、サブキーパーや若手スタップがほとんどです。その他、各地区を統括しているエリアコースマネジャーが20名ほど来ています。総勢120名と人数も多いですし、統制はものすごく重要だと思います。PGAツアーからの指示を忠実に



良好なコンディション作りにはしっかりと散水が大切

「練習ラウンドは休みも入れていたりしますが、大会開催期間中の4日間は毎日120名体制で作業します。北海道から沖縄までと、全国のアコーディアグループのコース管理スタップが参加しており、サブキーパーや若手スタップがほとんどです。その他、各地区を統括しているエリアコースマネジャーが20名ほど来ています。総勢120名と人数も多いですし、統制はものすごく重要だと思います。PGAツアーからの指示を忠実に

行えるよう、朝や夕方のミーティングには本当に注力しました。今回はサブキーパークラスが結構参加していますが、次キーパーになる、なりたい人材がここにきて、勉強し管理の幅を広げてキャリアアップしてもらうことも意図にはあります。ただ、基本的には選は各コースのキーパーに任せています。他のトーナメントに比べて120名はかなり多いと思います。人数が多いのが特別良いとは思いません。ただ前回のような記録的豪雨で水没したりと、何がわかるかからないといったイレギュラーもありますので、人数を揃えておくのは重要ですね。今回は

グリーン周りの花道やティーングエリアなど、ハンドモアで刈る面積をすごく増やしました。現在、機械自体は3連や乗用モアもかなり良くなっていますけど、やはりリスク回避が大事です。例えば大会の一週間前に、オイルがこぼれちゃいました、漏れちゃいました、などといったリスクを回避するため、ベアシックなタイプのハンドモアを使用します。もちろん、ストライプもきれいに覚えて美観を上げるという意味もあります」

「練習ラウンドは休みも入れていたりしますが、大会開催期間中の4日間は毎日120名体制で作業します。北海道から沖縄までと、全国のアコーディアグループのコース管理スタップが参加しており、サブキーパーや若手スタップがほとんどです。その他、各地区を統括しているエリアコースマネジャーが20名ほど来ています。総勢120名と人数も多いですし、統制はものすごく重要だと思います。PGAツアーからの指示を忠実に

グリーン周りの花道やティーングエリアなど、ハンドモアで刈る面積をすごく増やしました。現在、機械自体は3連や乗用モアもかなり良くなっていますけど、やはりリスク回避が大事です。例えば大会の一週間前に、オイルがこぼれちゃいました、漏れちゃいました、などといったリスクを回避するため、ベアシックなタイプのハンドモアを使用します。もちろん、ストライプもきれいに覚えて美観を上げるという意味もあります」



FW刈りをするスタッフたち



コーススタッフによるスティンプメーター

ここでスタッフの話が出たので、その話についても紹介したい。先の東京五輪（霞ヶ関CC）では、アコーディアグループから3名の女性スタッフがコース管理のメンバーとして選ばれた。その中のカップ切りを担当した女性1名、散水を担当した女性1名が今大会にも携わっているようだ。余談だが、同社から東京五輪に派遣した29名のうち、20名は前回のZOZOの経験者だったという。

「3名とも東京五輪もすごく良い経験になったと思います。今回、カップ切りを担当した尾崎に関しては元々、米シニアツアー『JAL選手権』（2017年）成田GC

C）、『マスターカード・ジャパン選手権』（2019年）同GC）、前回のZOZOでカップ切りを担当していました。ですので、東京五輪でも私の意図を汲み取って、スムーズに作業してくれてすごく



多くの人員を確保できるのはグループコースの強み



助かりましたし、今回も安心して仕事を任せられます」

東京五輪でもカップ切りを担当 女性コース管理スタッフの活躍

では、今回カップ切りを担当した尾崎めいさん（31歳）について紹介したい。現在、尾崎さんはアコーディア・ゴルフ 空港ゴルフコース 成田（18H、千葉県）に勤務している。尾崎さんは、琉球大学の農学部を卒業し、アコーディア・ゴルフに入社した。当時配属されていた成田GCでの丁寧な仕事ぶりが瀧口氏の目に留まり、米シニアツアー・JAL選手権のカップ切りの担当に選ばれたという。

「今回の大会と同様に、東京五輪でもコースの担当者がデニス氏だったのですが、東京五輪の色々な意図があり、最初の2人での打ち合わせの時点で、カップ切りは女性で2名でいこう」という話が出ていました。話が進む中でデニス氏から「タキ（瀧口氏）のところでは2名出せませんか？」と尋ねられ、アコーディアグループから2名の女性コース管理スタッフを派遣したというわけです」

また、アコーディア・ゴルフのコース管理には、ベトナム人の実習生が多数いるが、今大会で女性2名にはグリーン刈りやエプロン刈りを担当したという。とても真面目に働いているようで、小柄ではあるが、刈り込みスピードもかなり速く、コース管理の一翼を担っているようだ。

さらにコース管理だけでなく、オペレーションのボランティアにアコーディアグループのゴルフ場から40名参加したらしいが、そのうちの半数が女性従業員だったという。これは同社の「女性に活躍してもらおう」という方針が背景にあるという。

さてここで、尾崎めいさんにコメントをもらったので紹介しよう。「私はアコーディア・ゴルフに入社後、過去4回（米シニア2回、前回のZOZO、東京五輪）の大会のカップ切りを担当してきました。今回は5回目ということもあって、だいぶカップ切りの作業自体に慣れてきたなと思っています。例えば、ピンの正確さでしたり、カップの淵周りに白塗りするのですけど、そのスピードでしたり、手際の良さはどんどん良くな

カップ切りを担当した尾崎めぐみさん



つてきているな、と私自身で感じています。間違いなく過去の経験が活かしています。

主管のPGAツアーから練習ラウンドの時点でカップの深さを指摘されました。深さも結構シビアなことを言われます。1、2mm深くても浅くてもダメですので、カップの深さを均一にすることの重要性を改めて感じています。その調整をしっかりと行い、本番に臨みたいと思っています。

細かい指示も多いのですが、その時々によって突発的な指示も少なくないですので、その時その時に臨機応変にその指示に120%ぐらいの対応でできるようにと思

って臨んでいます。やはりフェアなセッティングにしないといけないので、すべてのグリーンで同じ状況を作ることとをすごく大切にしています。これを常に心掛けていますが、難しい部分もあります。しかし、やりがいがとてもあり毎日充実しています」

今回2年ぶりにアコーディア・ゴルフ習志野CCで開催された『ZOZOチャンピオンシップ』は来年の場所はまだ未定だそうだが、今後の展望について瀧口氏に本特集の最後を締めようとしてしよう。

「大会で行っている作業はあくまでトーナメント用の管理です。当社のコースでもエリアによって



グリーン刈りやエプロン刈りで活躍したベトナム人の実習生

運営状況もそれぞれ違いますし、たくさんお客様が入っている中でいかに作業効率を上げていくかがメインになっている中で、直接は生かせないと思います。でも、やはり良いものを知らないのと、どれを取り除いて自分のコースに合わせたいいこうかができないので、うまく考え方を变えて取り入れていることが重要だと思っています」



大会の成功はコース管理やボランティアスタッフの存在があってこそだ